1　講師の緊張を和らげる演出上の工夫
――――仮説――――

佐々木　正　實

(1)　はじめに

「講師にやさしい演出の研究」プロジェクトのメンバーは、大半が長年講座番組の制作に関わってきた経歴を持っている。メンバーの誰もが、講座番組が演出者の意図どおりに制作できないことの理由のひとつに、「講師の過度の緊張」があることを感じてきた。しかし、このテーマを正面切って話題にし、研究したことはほとんどなかった。

プロジェクトの最初の作業は、講座番組がいかに講師に心理的・生理的な重圧を強いるものであるかを再認識し、講師の緊張を和らげる演出上の工夫についてアイディアを出し合うことであった。言わば「経験に基づいた仮説」の構築である。本稿は、この話し合いの内容を筆者が体験をベースに再構成したものである。

(2)　講座番組の特色と「講師にやさしい演出」の必要性

a　出演者のタイプからみた講座番組

番組の出演者にも多くのタイプがある。「テレビの約束ごとに慣れているかどうか」「音声表現やアクション表現のプロであるかどうか」といった観点からみてみよう。まず目につくのは、芸能人やアナウンサーのように人前やカメラ前でしゃべったり演じたりするのが職業である人達＝「プロ出演者」である。また、評論家やジャーナリストのように自分の専門を人前やカメラ前で発表する機会の多い「セミプロ」もいる。

「素人」が出演するケースも実際には多い。しかし、素人が登場する場合には、プロ出演者が同時に出演し、番組が全体として破綻をきたさないように配慮してあるのが普通である。

典型的な講座番組は、「たった一人の出演者＝大学教官」で成り立っている。大学教官の中には芸能人顔負けのタレント教授もいれば、ふだん教室で講義をしているとは思えないほど恥ずかしがり屋の先生もいる。多くはテレビ出演はあまり得意とはいえない「素人」であろう。しかもこの「素人」が、「プロ」の介添え無しに出演しているのが典型的な講座番組である。この意味で、講座番組は珍しい番組である。

b　ストレートトーク番組の典型＝講座番組

一口に放送番組といっても、実に多様である。番組を放送する目的によって、娯楽番組、報道・情報番組、教育番組のように分けることもできるし、演出形態によってドラマ、バラエティー、中継、ドキュメンタリー、座談会、対談、ストレートトークのように分けることもできる。

ここで扱うのは、最後にあげたストレートトーク番組である。ストレートトーク番組とは、出演者がカメラに向かって一人でしゃべる演出形式の番組であり、同じトーク番組である座談会や対談、討論などとは区別される。

トーク番組
- ・ストレートトーク
- ・対談
- ・インタビュー
- ・座談会

ストレートトーク番組としては、ニュース解説、天気予報、講座番組などがあげられる。また、番組の一部としてストレートトークのコーナーを設けることもあるし、短いストレートトークをいくつかつなげた「ストレートトークリレー」のような番組もある。

教育を目的とした番組には、ストレートトークが頻繁に採用される。幼児番組ではまれであり、中・高校生以上の年齢を対象とした番組に多い。長時間のストレートトーク番組の典型が講座番組である。

c　出演者の心理的負担からみたストレートトーク番組

長時間のストレートトーク番組は、同じトーク番組であるインタビューや対談、座談会に比べ、ディレクタターとの緊密な事前打合せを必要とし、準備に時間がとられる。そのうえ収録時の心理的な緊張・負担も大きい。この非常に過酷なストレートトーク番組に、番組出演者としては素人である大学教官が挑戦しいるのが講座番組である。

d　「講師にやさしい演出」研究の必要性

講師が過度に「緊張」した場合、その「緊張」は、ブラウン管を通して視聴者にもそれと分かる。落ち着きのない異常な目の動き、うわずった声、台本にしばしば目をやりながらの棒読み・・・・見ていて気の毒になる場合すらある。これでは、視聴者は講義に引き込まれるどころではない。

番組の質をあげるために制作者はこれまで、講義内容の映像化や、提示方法とその教育効果の関係について研究し工夫してきた。しかし、講師の心理的負担を軽くする演出についてはほとんど関心が払われなかった。「出演者はプロである」または「出演者はプロでなければならない」といった前提で番組を制作していた。その結果、しばしば講師は制作者側の期待どおりに演じることができず、ディレクターは講師のタレント性の無さを嘆き、ミスキャストを後悔することになった。

講座番組担当ディレクターの最大の仕事は、「タレント性のある大学教官」さがしであると言われる。これも重要だが、ゆき過ぎると、学問上の実績があるにもかかわらずタレント性のない教官から出演の機会を奪うことにもつながってしまう。また、放送大学のように大量の番組を制作する場合には、タレント性のある教官だけでは番組数を消化しきれない。

ストレートトーク番組は、廉価に制作できる。そのうえ出演者の個性を生かし、密度の高い番組に仕上がる可能性を秘めた魅力ある演出形式と言える。このストレートトーク番組の可能性を広げ、出演者層を拡大するためにも「講師にやさしい演出」の研究は重要である。

ところで、講座番組と同じく素人出演者が主役の番組の中には、彼らの緊張を和らげる演出上の工夫をしてきた番組もいくつかある。例えばＮＨＫの「のど自慢」である。

「のど自慢」は、昭和21年１月29日に放送を開始してから50年、およそ６万人の素人がマイクの前で歌った。出場者の緊張を解きリラックスして歌ってもらうことに、演出者も司会者も全神経を使ってきたという。ラジオ時代を経、やがてテレビ時代になると、出場者が守らなくてはならない約束ごとはずっと多くなった。それにもかかわらず出場者が自由にのびのびと歌っているのは、日本人のマイク慣れやカラオケの普及によるところも大きいが、制作者が「出場者は素人である」ことを徹底的に意識した結果でもある。出場者がテレビの約束ごとに縛られて、のびのびと歌えなくなる事態を避けるため、制作者側は様々な工夫をしてきたのである。50年の経験のプロセスで工夫に工夫が重ねられた。

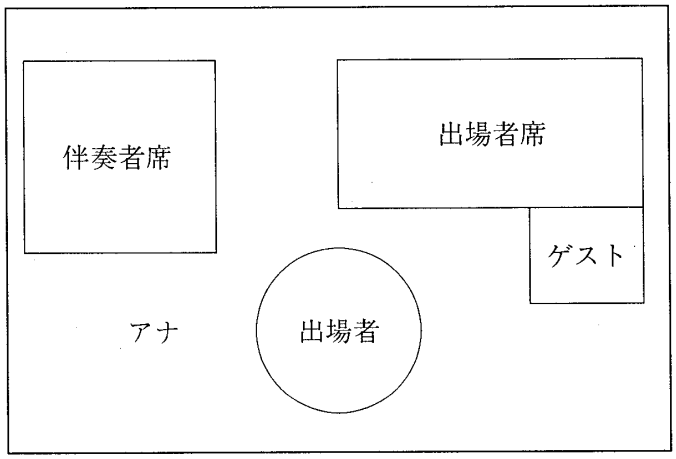
例えば、出場者の「立ち位置」の問題がある。この問題は、それまでの固定マイクからワイヤレスマイクに変わった昭和47年に発生した。出場者は自分の出番になるとマイクをもらい、照明がきちんとあたりカメラマンが待ち構えている立ち位置まで歩いて行かねばならない。そこには「バミリ」と呼ばれる目印のテープが貼られているが、このバミリを探してそこに立つだけでも、出演経験の少ない人には大きな負担である。担当者はこの負担を軽くするために、いくつかの試行錯誤を重ねた。

現在、のど自慢のステージには、大きな円が描かれている。出場者は、この円の真ん中に立って歌えばよい。目印をセットデザインの一部に組み込んでしまうことによって、立ち位置を堂々と示しているのである。これだけで出場者の負担は随分軽くなったであろう。

また、番組の流れが毎回全く同じなのも、出場者にはありがたいことである。いつも番組を見ている出場者は、自分の出場が決まる前から番組の流れ（台本）が頭に入っていることになる。

それでも「あがる」出場者も多いが、それ自体が計算されておりエンターテイメント番組としての質を高めることにつながっている。素人が出演することを徹底的に計算しているのだ。

図１　「のど自慢」のステージ



ステージに描かれた円

(3) スタジオ講義の特色———講演や授業とのちがい

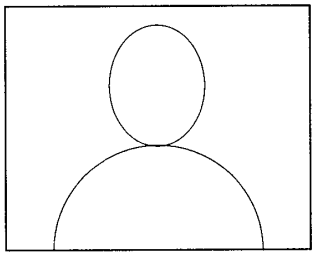
慣れない人が、スタジオでストレートトークを行う場合に緊張するであろうことは、誰にでも想像できる。それは何故なのか、わざわざ分析する必要のなさそうな「経験的な事実」を、あえて具体的に検討し整理してみたい。比較の対象は、同じストレートトークでありながら、スタジオでのストレートトークよりも緊張の少ないと思われる「会場での講演」および「教室での講義」である。

a 講義環境のちがい

講義環境のちがいは決定的である。中でも、聞き手がその場にいるかいないかは、話し手にとって重要な要素である。自分が話している相手の人数、年齢、性別、顔つき・・・・・それらが実感として分かることは講師にとっては大きな安心感につながる。アイ・コンタクトがとれれば安心感はさらに増す。聞き手がその場にいれば、表情や質問等で自分の講義を聞き手が理解しているかどうかもリアルタイムでわかる。

図表を説明したり、黒板に書きながら話したり、物を見せながら説明する場合などは別だが、直接聞き手に話しかける必要がある場合、聞き手がそこにいれば、講師は努力しなくても自然な目線がとれる。反対に、聞き手のいないスタジオでのストレートトークの場合、自信のある目線がとりづらくその結果講師には落ち着きが無くなってくる。人によっては逆にカメラから目線が外せなくなり緊張感は極限に達する。

図2 講師バストショット



「講師バストショット」の恐怖である。

教室や講演会場には聞き手以外の人は全くいない。いたとしても目立たず気にならない。これに対してスタジオには自分の話を聞いてくれる人は一人もいないのに、「第3者」が何人もいる。カメラマンなどの技術スタッフや、フロアーディレクターなどの演出スタッフである。しかも時に彼らは技術的なトラブルから、ひそかに、しかも慌ただしく動いたりする。なぜ彼等の動きが異常なのか、その原因のわからない講師は、ひょっとしたら自分が何かミスを犯したのではないかと不安にかられたりする。いずれにしても目ざわりである。雑踏の中の孤独、都会の中の孤独にも似た感覚に襲われる。

スタジオはホリゾントで囲まれ、本番中は蟻一匹入れない密室となる。この空間は、非日常的であり異常である。講義をする前から人の心を緊張させる。これに対して教室や講演会場には、普通は窓があり開放的である。スタジオの持つ圧迫感は無い。スタジオでは、さらに「照明」が加わる。自分にあてられた照明は日常感覚をいっそう麻痺させてしまう。

スタジオ環境の特色をまとめると

①聞き手不在 →
- ・聞き手の存在が実感できない不安
- ・聞き手の反応の確認ができない不安
- ・自然な目線がとれない不安（講師バストショットの恐怖）

②第３者の存在――――→　・都会の中の孤独

③密室性の強い空間　――→　・非日常的な感覚

b　台本による拘束

講演や授業にも予め考えた構成（ストーリー）がある。しかし、このストーリーは講義が始まってしまってからでも講師の意志でいくらでも変更できる。「予定された構成」は本人だけが知る単なるメモにすぎない。

これに対しスタジオ講義では、「台本」はスタッフ全員を拘束する統制力を持っている。台本は講師の意向を十分尊重した形で作られたはずである。しかし、一度本番が始まってしまうと、講師自身をも強く拘束する。台本から大きく外れることは許されない。大きく外れることはＮＧ（失敗）を意味し、撮りなおしにつながってしまう。

講義中の講師の頭を絶えずよぎるのは、「台本」からそれてはいないかという不安であり、次に何を話すのか、どんな映像が画面に出るのか、どの図表パネルが出るのか、といった「思い出し」の作業である。

優秀なアシスタントディレクターは講師の不安を除くために、またＮＧを避けるために、様々な指示を紙に書いてこっそり講師に見せるが、その走り書きが良く読めずに、不安がさらに増すこともしばしばである。

インサート素材の提示の順番を間違えることも許されない。途中で順序を変更したくなっても、また、すでに使った素材をもう一度見せたくなっても、それは通常不可能である。もう一度使うことを、あらかじめ台本に書いておかねばならなかったのである。

台本による拘束
- ①ストーリーに対する拘束
- ②素材提示順序に対する拘束

c　進行上の主導権をだれが握るか――――講師自身かディレクターか

講座番組でも、進行上の主導権は他の番組と同じように、通常ディレクターが握っている。ディレクターは進行上のきっかけとなるＱワードやアクションを台本に記しておいたり、事前に講師と口頭で約束したりしておいて、本番では講師が約束どおり演じてくれることを期待する。

例えば、講師がＱワードである「次の図を見ていただきます」と言うセリフをしゃべったらディレクターはカメラを図表に切り換える指示を「スイッチャー」に出すことになる。Ｑワードをなかなか言わなかったために、いつになっても図表が出ず、講師がキョロキョロしたりすることも時々おこる。

画面転換のＱワードを約束せずに本番に入ってしまい、講師とディレクターが、そのタイミングについて、視聴者にはわからないが熾烈な「かけひき」をしたりするすることもある。
まだ前の説明が終わっていないのに画面はＶＴＲに変わってしまうといったことはしばしば生

じる。

この点、講演や教室講義では、講義進行の主導権は、通常100％講師自身が握っている。ただ、講演会などでは、時にＯＨＰやスライドなどのプレゼンテーション機器の操作は、アシスタントなり会場の職員が行うためにスタジオと同じような「みっともない場面」がおこることもある。

d　からだの位置や動きに対する制約

授業や講演では，講師の位置や動作は、常識の範囲内で全く自由である。立ったまましゃべってもよいし、椅子があるなら座ってもよい。すべて自分の意志のままである。誰も指示しない。しかし、スタジオではそうはいかない。台本の何ページでは、どこにいてどのカメラに向かって話すべきか、きちんと決められている。フロアーディレクターが講師の動きや目線を誘導するため、台本をまるめて合図してくれるが、それに従っての動作は何かぎこちない。

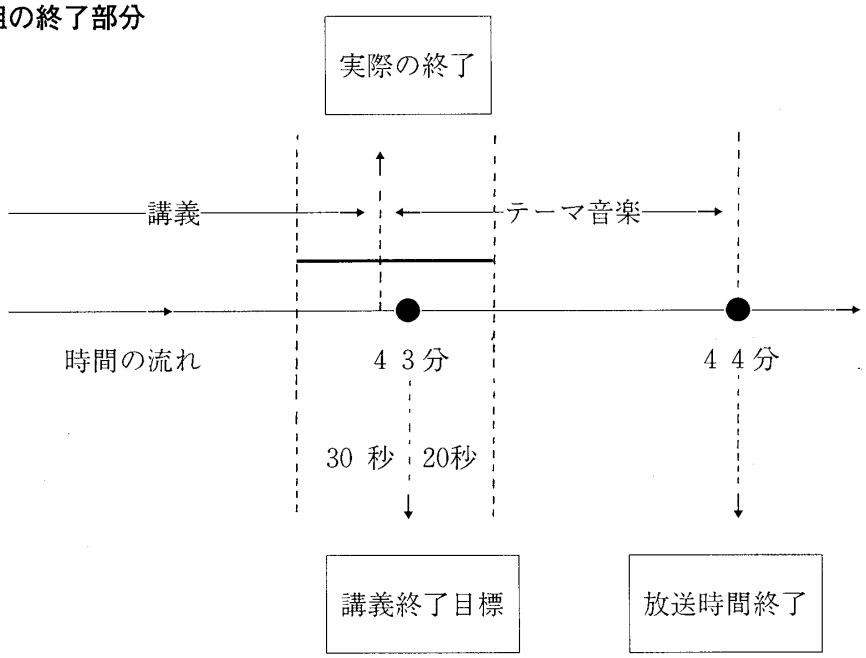
物をカメラに見せるのも大変である。カメラにきちんと正対しなければならない。照明が反射して光ってもいけない。モニターを見て修正しようと思っても、左右が逆になっているため何が何だかわからなくなってしまう講師もいる。

e　講義時間の制約

授業や講演にも決められた終了時間はあるが、普通は融通がきく。しかし、スタジオでの終了時間は絶対的である。１時間番組であっても、講義終了時間の融通の幅はわずかである。20－30秒の「早終」や「押し」が認められるのがせいぜいであろう。

放送大学授業番組の場合には、講義終了目標（43分）を挟んで下の図の―――の範囲（30秒の早終、20秒位の押し）が、最大限の幅である。

図３　番組の終了部分



テーマ音楽は42分30秒に音を絞ったままスタートし、講義が終るとボリュームを上げる。

f　公開性

スタジオの密室性とは逆に、放送自体は公開性に特徴がある。この公開性が出演者にプレッシャーを与えることになる。誰でも見ることができるということは、誰が見るかわからないことでもある。ひょっとしたら、同じ専門の学者が見るかもしれない。同業他者の目は、どの世界でも非常に気になるものである。

こうした意識は言いまちがえを極端に恐れることにつながり、緊張感を強めることになる。その結果、台本の余白にぎっしりと講義する内容を書き込んでおかないと不安でたまらないという講師も多い。

(4)　緊張を和らげる演出上の工夫

聞き手との双方向性が保証された環境の中で、講師主導で自由に行われるのが会場講演や教室講義であり、聞き手不在の環境の中で、約束ごとに拘束され、ディレクター主導で行われるのがスタジオ講義であることをみてきた。講師の生理的心理的な負担という点では、スタジオでの講義はあらゆる点で、会場での講演や教室での講義よりも劣っていると言える。

それでは、講師の負担を軽くし、緊張を和らげる演出上の工夫はないのだろうか。まず考えられるのが、教室からの中継形式である。会場講演や教室講義に近いこの方法が、講師の緊張の点でスタジオ講義より勝っていることは、実験を行うまでもないことであろう。

次に考えられるのは、スタジオを教室や講演会場に近づけることである。具体的には、スタジオに聴衆（学生）を入れる方法である。これも、講師の緊張を和らげるであろう。

しかし、このような中継方式や視聴者参加方式は、準備に時間がかかり、そのうえ制作費もかさむ。日常的に大量の番組を制作する場合には向かないのである。また、ナマ放送に近いこのふたつの方式は、何年間にもわたって再放送するような番組にはもともと適さない。ここではあくまで「カメラ相手のストレートトーク」にこだわって話を進めたい。

一方、講師の負担が軽ければそれでよいという発想もとらない。講師の緊張は和らいだが、そのために、テレビの特性が生かせない結果になっては意味がない。講師の「過度の緊張」を和らげ、生き生きした講義をしてもらうのがねらいである。

「カメラ相手ストレートトーク」の持つ弱点をどうやって補い、「聴衆相手ストレートトーク」の感覚に近づけるか。検討のポイントは次の６項目である。

１、スタジオ環境の特性からくるストレスを和らげることはできないか
　　――――――特に「講師バストショット」を減らせないか
２、約束ごとを少なくできないか
３、講義の流れを思い出しやすくできないか
４、講師に講義の流れを変更する自由を持たせられないか
５、進行上の主導権を講師自身に与える方法はないか
６、時間管理の負担を軽減する方法はないか

この６つの項目について検討した結果、実現可能なアイデアとしてプロジェクトメンバーの合意を得たのが、次の９つの「演出上の工夫」である。

表１　演出上の工夫（仮説）

項目		従来の方法 ⟶ 緊張を和らげる方式（仮説）
1	基本セット	「すわり」⟶ 白板前立ち（動きのある演出）
2	図表・写真等	紙芝居方式 ⟶ 美術館方式
3	ツール操作	ディレクターが操作⟶ 一部を講師が操作
4	次画面表示装置	なし⟶ 使用
5	プロンプター	なし⟶ 使用
6	台本	① 縦書き⟶ 横書き ② 書き込み型⟶ 項目のみ
7	ディレクター	副調整室で指揮⟶ スタジオで指揮
8	時間調整	通し収録⟶ 終了近くでの中断を挟んだ収録
9	素材ＶＴＲの説明	本番同時収録⟶ 事前収録

以下、項目ごとに説明したい。

ａ　「白板前立ち」（動きを伴った講義）

この場合の「立ち」は、ただ単に教壇に立つということではなく、白板やパネルの前に立ち素材を直接指したり、あるいは書き込んだりしながら講義することである。「動きを伴った講義」と言い換えることもできる。ＯＨＰを使った講義なども含まれる。

この形式は何も目新しいものではない。時々、情報番組の解説コーナーなどでお目にかかるし、講座番組でも採用されている。その典型がＮＨＫの高校生向け「数学番組」である。講師がこれほど自然に、また自信をもって講義をする番組はそれほど多くはないと言われている。

放送大学授業番組では、どうであろうか。平成５年度に制作した番組のうち、放送教育開発センターのデータベースに登録済の27科目362本について調べてみた。この362本に出演した講師は、延べ426人である。

表２　　放送大学授業番組の演出形式

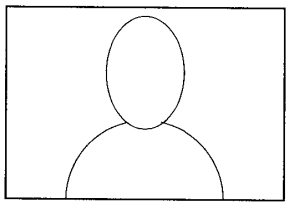
	講師の人数	割　　合
カメラ向き座り	３６６人	８５、９％
白板前立ち	２４人	５、６％
その他	３６人	８、５％
計	４２６人	１００、０％

白板前立ちは、きわめてわずかであることがわかる。およそ、86％の講師が、座ってカメラに向かって講義をした。また、45分間１人の講師が、カメラ向き座りで講義をするという典型的な番組は、362本のうちの253本であり69.9％にあたる。なお、「その他」には、スタジオを使わない現場講義や、座談会、立ちと座りの混合形式などが含まれる。

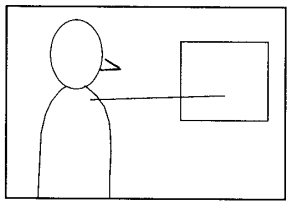
「白板前立ち」は、講師の緊張を和らげるうえで、いくつもの利点を持っていると思われる。まず、「白板前立ち」は講師が日頃教室で行っているスタイルであり、聞き手不在とはいえ最も安心して講義できる形式である。

「白板前立ち」は、「講師バストショットの恐怖」を減らすことができる。「白板前立ち」は、動きを伴った講義である。アクションを伴えば、画面は自然に「ルーズショット」が多くなる。

図４　バストショットとルーズショット



バストショット

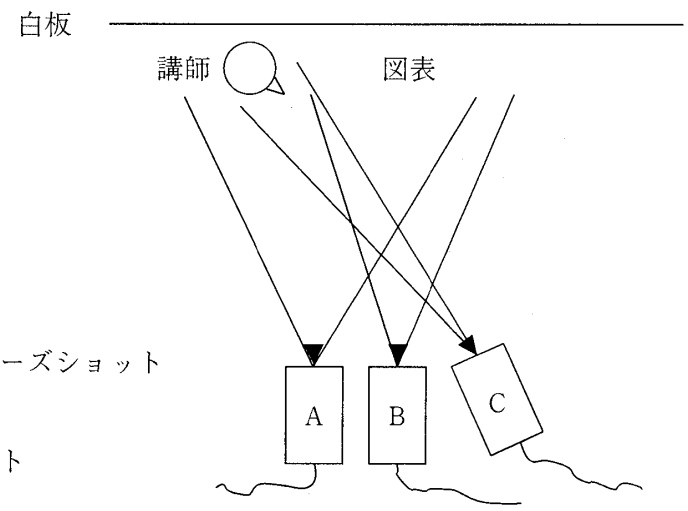


ルーズショット

また、「白板前立ち」は、講師とディレクターの約束ごとの少ない演出形式である。講師は白板の付近で自然にふるまえば良いのである。自然にふるまってもＮＧ（失敗・録りなおし）にはなりにくい。そう思うだけでも講師の緊張はだいぶ和らぐであろう。

ＮＧの起こりにくいわけを具体的に説明しよう。３台のカメラの撮る映像を、あらかじめ例えば次のように決めておく。

図5　カメラ割り



Aカメラ・・・講師入れ込みのルーズショット
Bカメラ・・・白板（図表）ＵＰ
Cカメラ・・・講師バストショット

カメラマンは、原則として決められた映像を撮る。カメラは、必要が生じた時にのみ、パンをしたりサイズの調整をしたりする。こうすれば、講師が白板付近でどんな動きをしようと、ＡＢＣカメラのどれかは採択可能な映像になる。この採択可能なカメラの中からひとつを選んで切り換えれば画面構成に破綻をきたすことはない。

表2　各カメラの絵柄の例

（×印は採択不可）

	Cカメラ向きで説明	図表を使って説明	図表に書き込む
A	× 目線不自然	○	◎ うしろ姿
B	× 文字・図表アップ	◎ 文字・図表アップ	× うしろ姿
C	◎	× 横顔	× 横顔

講師は、白板から１歩うしろに下がって画面から消えることもできる。画面から消えた講師は、そこで落ちついて台本を確認し、ついでに深呼吸をしてから再び画面に登場することもできる。この間、画面は「白板アップのＢカメラ」に切り換えておけばよいのである。また、画面から消えれば少しの時間なら沈黙していてもおかしくない。時間管理の余裕も生まれよう。

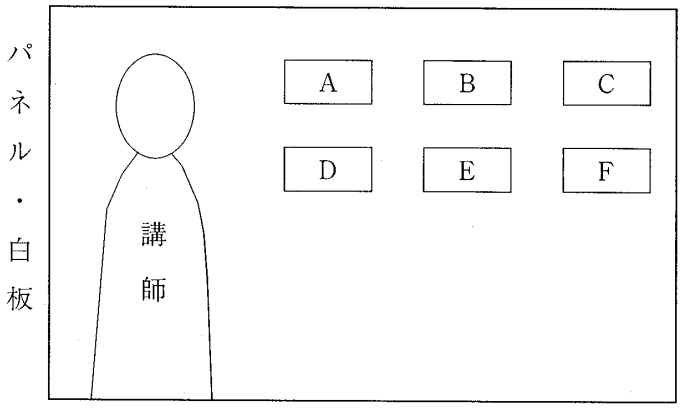
講師がどんな動きをしようと対応できるということは、講師が台本からある程度開放されることでもあり、番組進行上の主導権をディレクターの手から取り戻すことにもつながる。その具体例が、次にあげる「美術館方式」である。

b　使う予定の図表・写真等を全て貼りつけるおく「美術館方式」

従来、図表・写真等は「紙芝居方式」になっており、提示の順番が決まっていた。その結果本番中に講師の意志で順番を変更することは難しい。また、一度使った図表・写真等を、講師がもう一度使いたいと思ったとしても、事前の打合せがない限り実現はむつかしい。すでに触れたことである。

図表・写真等の提示の主導権を講師に持たせることはできないのか。その答えがこの方法である。これは、図表・写真等を紙芝居のように重ねるのではなく、大きなパネルや白板に絵の展覧会のように並べて貼っておくやりかたである。紙芝居方式に対して「美術館方式」とでも名付けられよう。講師は、パネル（白板）の前または脇に立ち、貼りつけられた図表・写真等を説明する。約束通りの順番で使っても良いし、予定を変えて使ってもよい。

図６　美術館方式



この美術館方式は、予定された構成（番組の流れ）を思い出さねばならないことからくるストレスを和らげるための工夫であると同時に、講師に講義の流れを変更する自由を与えるための工夫でもある。また、カメラスイッチングのタイミングを講師主導で行う方法でもある。講師が説明を始めたら、その図表・写真等を写しているカメラに切り換えればよいのである。

c　次画面表示装置の導入

通常のモニターの他にもう１台モニターを置き、次のインサート素材が何であるかを講師に教えようとする試みである。これも、番組の流れ（台本）を間違いはしないかという不安から

くる緊張感を和らげる工夫のひとつである。

講師が絶えず気にしているのは、今、何がどう映っているかとともに、次のインサート素材が何であるかであろう。図表や写真なのか、ビデオなのか、どんな内容の図表なのか、どんな内容のビデオなのか・・・・。つまり、「次に話すべき話題は何か」である。

講師が、本番中に「次のインサート素材」を知る方法にはいくつかある。

・リハーサルを繰り返し、台本を頭の中にたたき込む。
・台本を盗み見る。
・フロアーディレクターや、アシスタントディレクターなどが、紙に書いて見せる。

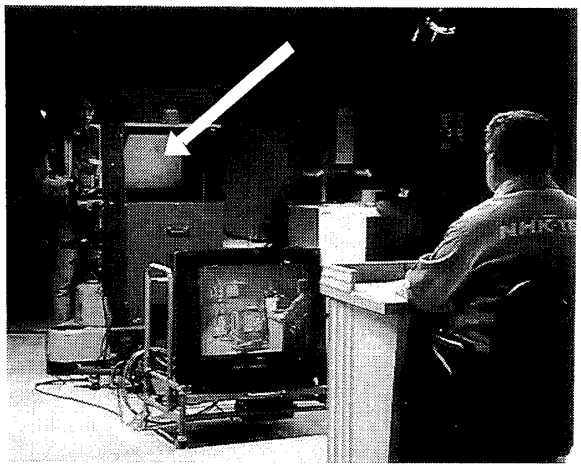
台本を頭にたたき込むのは大変である。講義をしながら正しく台本を盗み見るのも、大きな緊張を伴うことである。誰かが紙に書いて見せる場合、次が図表かビデオかといった大きな流れを伝えることは出来るが、その中身を的確に伝えるのはむつかしい。そこで考えたのがこの方法である。次画面表示モニターには、図表パネルやテロップあるいは素材ビデオの冒頭の絵を出しておく。

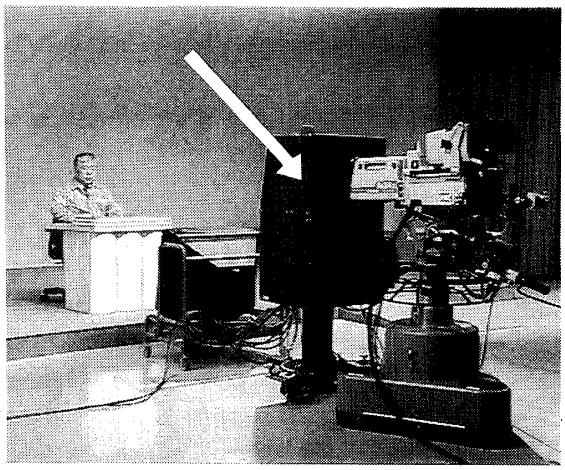
講師の前には、現在の映像を写すモニター（エアモニ）と次画面を写すモニターが並ぶことになる。その結果、かえって講師の頭の中を混乱させてしまう心配もないわけではない。

d　プロンプターの活用

プロンプターは、アナウンサーやキャスターにニュース原稿を見せるための装置で、どこの放送局でも、日常的に使用されている。プロンプターは、カメラと連動しており、キャスターがカメラ方向を見るとレンズの位置に取り付けられたモニターにキャスターの机の上の原稿が映し出される仕掛けになっている便利な装置である。視聴者には、キャスターが自分に向って語りかけているように映り、まさか原稿を読んでいるとは思えないところがミソである。なおキャスターの机の上の原稿を映しているのは、天井から吊り下げられた小さなカメラである。

＜放送教育開発センターのプロンプター＞





このプロンプターに台本の骨子（構成）を表示するなら、講師は安心して講義できるであろう。講師が動かずに定位置で講義する場合には、有効ではないかと思われる。しかし「白板前立ち」ではむつかしかろう。

e　台本上の工夫

予定されたた構成（番組の流れ）を思い出す緊張感を和らげるためには、流れが大づかみに一瞬のうちにわかった方がよい。プロンプターの活用もそのための工夫であるが、講師が定位置を離れて講義をする場合には使用できない。

そこで、台本そのものを見やすくする工夫を考えたい。出演経験の浅い講師ほど、事前に台本に講義の内容をぎっしり書き込む傾向にある。忘れはしまいかという不安がこうさせるのである。しかし、いざ本番中に盗み見をしようとしても、あまりにも細かい文字が並んでいるので正確に読み取れないという結果になりやすい。いよいよあがってしまうことになる。

したがって、ぎっしり書き込むよりは、項目のみ、ポイントのみをわかりやすく書いた方がうまくゆくだろうと想像できる。また、縦書きよりも横書きの方が良いのかもしれない。

f　講師によるツール操作

番組進行上の主導権をディレクターの手から講師に返す工夫のひとつである。番組進行上のタイミングにからむボタンは、カメラ切替え、テロップチエンジ、テロップスーパーなどいくつかあるが、そのひとつがＶＴＲスタートボタンである。

ＶＴＲスタートボタンは副調整室にあり、多くの場合ディレクターが操作している。このボタンを副調整からスタジオに移し、講師自身が操作できるようにしようとするものである。その結果、講師はＶＴＲを自分がインサートしたい時にベストタイミングで再生できることになる。ＶＴＲスタートの微妙なタイミングを、講師主導で行おうとする試みである。

この方法であれば、ＶＴＲに切り替わる直前の講師の不安と緊張は和らぐに違いない。しかし、講師にとっては、ボタンを押さなければならないストレスが新たに加わることになる。差し引きがどうなるかは、比較実験を重ねてみないと何とも言えないところでる。

様々な操作を出演者主導で行う試みは、後発の小規模放送局などでは、すでに行われており実用化の段階に入っているところも多い。省力化、合理化の発想から、以前なら技術係やディレクターが行っていた業務を、スタジオの出演者が行うようにしたものである。

例えば、ＣＳ（通信衛星）を使って、授業番組をナマ放送している北海道情報大学の場合もそうである。ここでは、副調整室には通常、人がいない。スタジオには、出演講師とアシスタントがいるだけである。講師は８つのボタンの中から、オンエア画面をセレクトしている。８つのボタンとは、講師カメラ、机上（頭上）カメラ、書画カメラＡ、書画カメラＢ、ＶＴＲ、パソコン、スライド、それに教室カメラである。講師が操作を忘れたり間違えたりした場合には、アシスタントがもう１台の切替えボックスでバックアップしている。

北海道情報大学の場合は、番組の全責任を講師が負っており、講師個人の手作り番組といった色彩が強い。これに対して放送大学やＮＨＫの教育番組の場合には、制作チームの合作であり、有人マルチカメラ方式を採用している。したがって、あらゆる番組進行上の操作ボタンを

講師の手に渡してしまったらＮＧ（失敗）が続発してしまうだろう。

g　ディレクターがフロアーで指揮をとる

講師にとって、制作チームの中で最も親しいのはディレクターである。講師は、ディレクターと打合せを重ねながら番組の準備をしてきた。そのディレクターが、肝心のリハーサルや本番となると、スタジオから姿を消し副調整室に入ってしまう。ディレクターと直接コミュニケーションをとることができない講師の不安は高まる。

そこで、もしディレクターがフロアーで指揮をとることができたら、講師はずっと安心して講義ができるはずである。ディレクターにとっては、フロアーディレクターを経由しないで直接講師とコミュニケーションがとれるというメリットが生じる。その結果、台本から外れる許容範囲も広がるであろう。

h　中断をはさんだ収録

講師の時間管理の負担を和らげる方法はいくつか考えられる。例えば、予定時間より長めに収録し、後で編集して完成させる方法がある。しかし、これは編集のために手間暇がかかり多くの番組を次々と制作しなければならない放送大学のような場合には現実的ではない。また番組の長さそのものに柔軟性を持たせる発想もあろう。だが、これも日本の放送界の習慣から考えると実現はむつかしいだろう。

「終了近くの一時停止」なら現実的である。終了近くの「適当な話の切れ目」で収録を一端中止することを、あらかじめ約束しておく方法である。中断したところで講師とディレクターが残り２－３分あるいは４－５分のまとめ方を打合せ、準備万端整ったところで残りの部分の録画を始めるのである。講師は、中断までの部分（全体の９割程度か）を、ある程度の幅をもった時間におさめればよく、これなら負担はかなり軽減されるはずである。

i　インサートＶＴＲの説明を事前収録する

番組の途中でＶＴＲ映像を見せる場合、その音声（ナレーション）の入れ方には何通りかある。

① 講師以外の人がナレーションを担当する方法
② 本番中に講師が解説する方法
③ 本番前に講師の解説を収録してしまう方法

講師にとっては、本番が始まってもＶＴＲの時間がくると休憩できる①と③が楽である。この休憩時間に講師は時間のチェックをし、その後の講義の進め方を確認できるのである。

(5)　むすび

講師に心理的な負担を強いるであろうことがわかっていながら、その負担を和らげるための現実的なアイデアの浮かばなかったテーマもいくつかある。例えば、

①聞き手の反応を講師が実感できないことからくる不安を和らげる工夫

②灰色のホリゾントに囲まれた密室の非日常的な空間を変える工夫
③技術スタッフや演出スタッフの「目ざわり感」を和らげる工夫

これらについては、別の機会にゆずることにし、今回の検討の結果を、予想される効果と関連づけて表にまとめてみる。

表3　9つの工夫と予想される効果

		予想される効果					
		環境特性	約束ごと	台本暗記	台本変更	主導権	時間管理
演出上の工夫	白板前立ち・動き	○	○	○	○	○	○
	美術館方式	○	○	○	○	○	
	講師がツール操作	○	○		○	○	
	次画面表示装置			○			
	プロンプター			○			
	台本上の工夫			○			
	フロアーで指揮	○			○		
	中断を挟んだ収録						○
	ナレーションの先撮り			○	○		○

注：予想される効果

環境特性・・・スタジオ環境からくる緊張を和らげ、特に「講師バストショット」を減らす。

約束ごと・・・約束ごとを少なくする。

台本暗記・・・講義の流れを思い出しやすくする。

台本変更・・・講師に講義の流れを変更する自由を持たせる。

主導権・・・・進行上の主導権を講師自身に与える。

時間管理・・・時間管理の負担を軽減する。

講師の心理的な負担という点からみたスタジオ講義の最大の難題は「聞き手不在」である。「聞き手不在」が、講師の最もいやがる「講師バストショット」を必要不可欠なものにしているのであった。

「動きを伴った講義」は、「ルーズショット」を多用することを可能にし、「講師バストショット」を減らす効果が期待できる。加えて、表にまとめたように、いくつもの「緊張要素」を和らげる可能性を持っている。

今回、動きを伴った講義の典型として提案したのが「白板前立ち」である。「白板前立ち」をベースにして講師が主体的に番組の進行をリードしてゆけるように、いくつかの工夫を加味した「柔軟な演出」をすれば、講師はスタジオでの「カメラ相手のストレートトーク」にもかかわらず過度の緊張を感じることなしに生き生きとした講義ができるであろう。

この結論（仮説）を検証しようとして行った実験の報告が、第２部以下のリポートである。